



(注意)スクリプトを **executable** モードで起動しないと、ボタンの実際の動作は確かめられない。また、**executable** モードで立ち上げたスクリプトを **edit** モードに変更すると、**sitemap** を残してウインドウが消えることに注意する。編集は、スクリプトファイル(.adl)をエディタで開いて行うのが良い。  
 (注意)コピーアンドペーストは **medem** 上ではうまく働かないので、エディタを経由して行う。**Linux** で典型的な反転でコピー、中央クリックでペーストである。

## コマンド、ディレクトリ構造

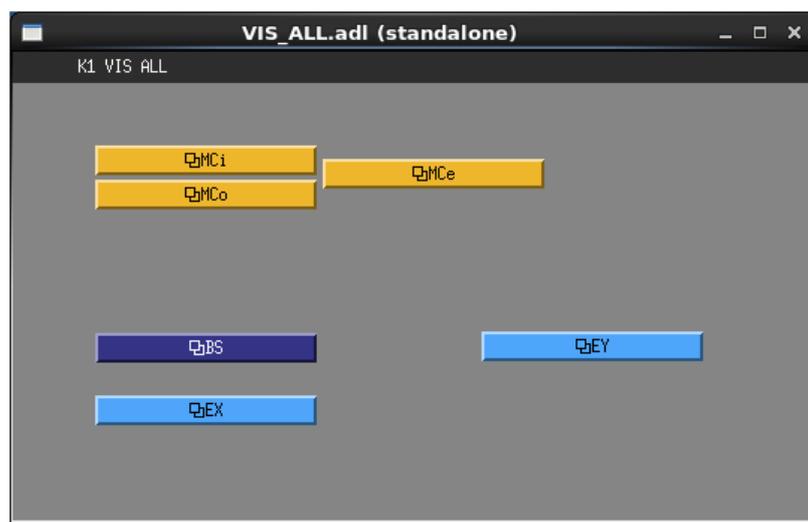
今回のシフトでは主に **medm** を用いたスクリーン作成である。**medm** はリアルタイム **LinuxOS** で動く **stand alone** の中の **/opt/rtcads/kamioka/k1/medm** にある。**/opt** 以下は、クライアント PC に NFS マウントされている。クライアント PC のデスクトップにもリンクがあり、それをダブルクリックしてもよい。

**VIS** で用いられるスクリプトは、**/opt/rtcads/userapps/release/vis** 以下にある。

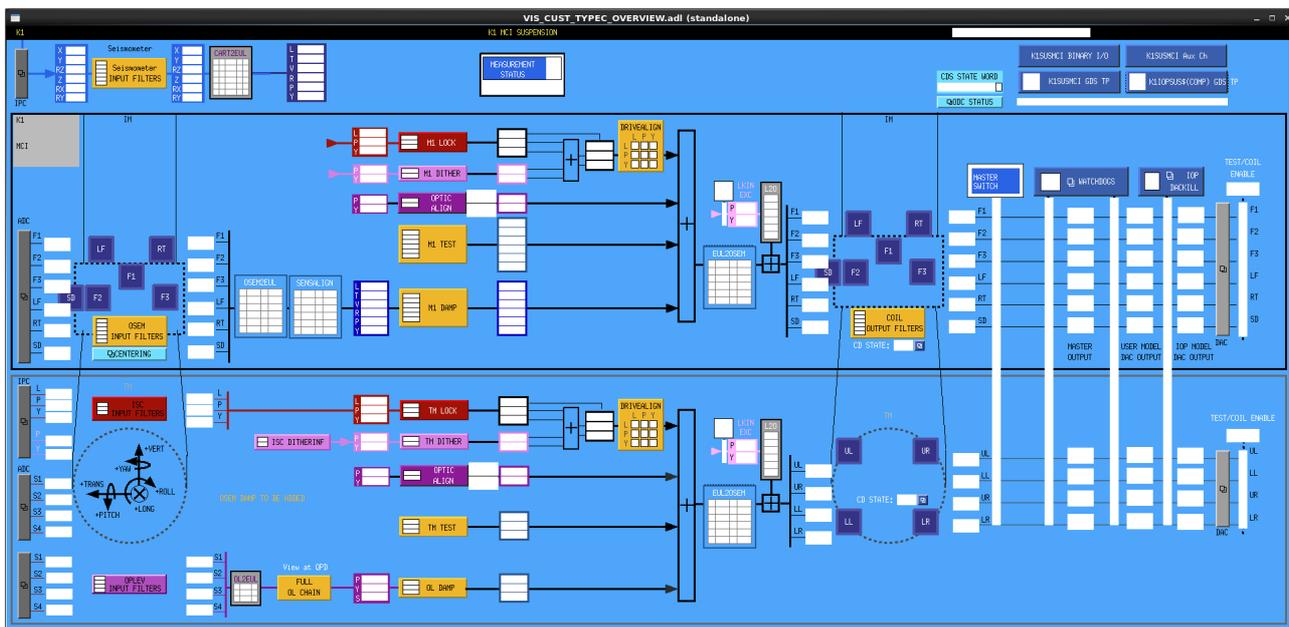
**sitemap** は **/opt/rtcads/kamioka/k1/medm** 以下にある。

**Sitemap.adl** 中の **VIS** ボタンをクリックして立ち上がるスクリプトは

**vis/common/msdm/VIS\_ALL.adl**



**VIS\_ALL.adl** 中の **MCi**, **MCo**, **MCE** ボタンは同じスクリプト(**Display File**)**VIS\_CUST\_TYPEC\_OVERVIEW.adl** が立ち上がり、環境変数である **Arguments** が違う。**VIS\_CUST\_TYPEC\_OVERVIEW.adl** は **VIS\_ALL.adl** と同じ **vis/common/medm/**以下にある。



これらスクリプトの元ファイルは/opt/rtdcs/ligo\_userapps/trunk/sus/common/medm 以下に存在するので、それらを必要に応じて vis/common/medm/以下にコピーし sus を vis、bfms を TYPEC、M3 を TM などと変えて用いる。

## VIS\_ALL

MCI から始める。

medm から、file->open->VIS\_ALL.adl で、スクリプトを Edit モードで立ち上げる。

### Display File

\$(userapps)/vis/common/medm/VIS\_CUST\_TYPEC\_OVERVIEW.adl

### Arguments

IFO=K1, ifo=k1,SITE=KAMIOKA,site=kamioka,userapp=/opt/rtdcs/userapps/release,  
OPTIC=MCI

正しそうなので、変更せずに閉じる。

MCI の VIS\_CUSTTYPEC\_OVERVIEW を executable モードで立ち上げ、ボタンをクリックしながら確かめる。今回は TM 部分のみの変更なので、下段のみを編集する。

下段左端のボタンを押すと、SUS\_CUST\_BSFM\_ADC\_MONITOR.adl が無いと言っている。確かに vis/common/medm 以下にはない。

そこで、まずは ligo\_userapps 以下から対応するファイルをコピーし、同じディレクトリに置き、動くようであれば、ファイル名を KAGRA 用に変更していく。この場合、対応するファイル

は/opt/rtdcs/ligo\_userapps/trunk/sus/common/medm/bsfm 内にあった。同様に次々とファイルをコピーして移していくが、時々、チャンネル名に M1 なるものがあるが、それも M3 と同様に TM に置き換える。また OPLEV のラインで OL DAMP 以降の変数が3つになっているが、SUM は使わないので1変数削除して2変数にする。OL DAMP 後のチャンネル名は VIS\_CUST\_TYPEC\_TM\_OLDAMP\_P と VIS\_CUST\_TYPEC\_TM\_OLDAMP\_Y になる。